

ダビデとキリスト

(マタイ1:1~17)

一、はじめに

マタイの福音書の始めに系図が挙げられているのは、そのことが必要だったからなのであります。この福音書は、イエスの十二弟子の一人マタイが書いたとされています。マタイは、教会が誕生してからかなりの年月が経過してから、福音書を書き著すに当たり、系図から書き始める必要を思ったのであります。ちなみに、1章1節の「系図」と訳された元の言葉は「ビブロス」であり、「本」ないしは「物語」の意味もあります。ですから、マタイは単に系図を書くことではなく、イエス・キリストの善き知らせの物語の初めとして「系図」を書いたのだ、と受け止めたらしよしいかと思えます。

二、「マタイ」を開いた理由

きょうから、シリーズ説教「ダビデの生涯に学ぶ」を始めます。第1回目として、マタイの福音書を開いた理由は、ここにダビデとイエス・キリストのつながりが書いてあるからです。1節に書かれています。「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」と。ここで語られていることは、神であ

りながら人としてお生まれくださったイエス・キリストがアブラハムの子孫であるという系図であり、ダビデの子孫であるという系図です。

イエスの時代、ユダヤ人は自分たちのことを「アブラハムの子(子孫)」と呼びました。また、メシア(キリスト)を指して「ダビデの子(子孫)」と言いました。それほどに、ダビデとメシア(キリスト)は関係が深いのです。当時、ダビデは理想的な王、天から遣わされるメシア(キリスト)として、人々の思いに定着していました。それは、イエスの弟子たちとて同じです。そのような考え方が修正されたのは、主イエスが私たちの罪のために十字架にかかって死なれ、三日目に復活させられ、五十日後に聖霊が降り、教会が誕生したときでした。その後教会は、ダビデをメシア(キリスト)の型として、すなわちやがて現れる救い主をあらわしている特別な器として見るようになりました。

三、約束によって成る

系図の話に戻りますが、ユダヤ人は系図を重んじました。と言うことは、由緒ある系図もあれば、そうでない系図もあつたことでありましょう。ですが、主イエスはおっしゃいました。「マタイ3:9『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない。あなたがたに言っておくが、神は、

この石ころからでも、アブラハムの子孫を起すことができになるのです。」

と。すなわち、罪の下にある人間が系図を重んじるようには、神は考えられないと解き明かされました。つまり、このころ、教会にとって系図は重要でないのです。神の子イエスを信じて、御霊によって新しく生まれることがたいせつなのです。であるのに、マタイが系図を持ち出した理由は何かなのでしょう。それは、最初の読者が、ユダヤ教からの改宗者、ないしはユダヤ教をよく知っていたキリスト者であつたからなのであります。言わば、読者の思考パターンに合わせて、キリストの善き知らせを語ろうとしたと考えられます。

1章1節から17節までの、アブラハム↓ダビデ↓バビロン移住↓イエス・キリストという系図を見ると、「キリストに至る系図は人間的には少しも誇るところがない。神の約束によって成る」と、マタイが語ろうとしている気持ちが伝わってまいります。と言いますのは、キリストはユダ族出身のダビデ王の子孫から出現しますが、あくまでも約束によるものだからです。

少し見てまいりましょう。3節です。タマルは娼婦と呼ばれても仕方のない女性でした。しかも、異邦人でした。次に、5節です。ラハブは、ヨシヤが遣わしたイスラエル人の偵察隊を匿つたという理由で評価されていますが、カ

ナン人の娼婦でした。また、ルツはモアブ人の女性でした。さらにもう一箇所、6節です。ダビデ王の後継者はソロモンですが、ソロモンはダビデとだれとの間に生まれた息子だったのでしょうか。バテ・シエバです。そうであるなら、なぜバテ・シエバと書かず、「ウリヤの妻」と書いたのでしょうか。ここにも、マタイが語ろうとしていることを窺い知ることができます。つまり、マタイは敢えて不利になることを書いています。キリストの系図は、人が誇れるものではないと知ります。しかし、それなのです。神のご計画は、神の主権によって成されるからです。

四、ダビデとキリスト

ダビデはキリストの型、すなわちやがて現れる救い主をあらわしている特別な器です。もちろんダビデはキリストと異なり、一人の罪人でもありません。しかも、王という、神の代理者としての働きをする立場にありましたから、その権限たるや、大きなものでした。そして、王ならではの誘惑にもさらされ、罪を犯した場合の責任は重大でした。そういう中であつてうめき、もがき、神に祈り求め、主に栄光を帰していく姿は、罪を犯したこと以外はキリストの御姿と重なるところが、ひいてはキリストの御姿に似ていく私共になるるところがあります。